Le nez de Cléopâtre : s'il eût été plus court, toute la face de la terre aurait changée.

　絶世の美女クレオパトラは、本当は肌の色が黒いエジプト人だった。
ブ―――ッ、違う。クレオパトラはギリシア人である。エキゾチックな容貌だったようにも思えるが、顔はギリシア彫刻を思い出せばいい。白人顔をした映画俳優のキリストはおかしいが、クレオパトラならいいのだ。　なぜギリシア人がエジプトのファラオ(王)になったのか？西暦前 332 年、古代エジプトはギリシア人のアレクサンダー大王により滅ぼされた。大王は祝宴中、蜂に刺されて倒れ、「最強の者が帝国を継承せよ」との遺言を残す。将軍たちが覇を争い、プトレマイオス将軍がエジプトを支配するようになるのだが、そのプトレマイオス王朝の最後のファラオがクレオパトラ(７世)というわけだ。　　ヴィヴィアン・リー『シーザーとクレオパトラ』1945

「**クレオパトラの鼻が少し低かったら歴史は変わっただろう**」という
　パスカルの言葉は有名だ。「少し低かったら」と言われると、クレオパトラは鼻が高かった、美人だったと日本人は思う。
つまり《クレオパトラがもし不美人だったら歴史は変わっただろう》と解釈する。
しかし「低い」と邦訳された元のフランス語「**court**」は、正確には「短い」という意味で、フランス人は、鼻が高い(大きい)のは美人の形容ではなく、むしろ欠点と思うそうだ。

パスカルの『パンセ』の中にあるそのフレーズのフランス語原文。
　Le nez de Cleopatre : s'il eut ete plus court, toute la face de la terre aurait changee.
「**もしクレオパトラの鼻が少し短かかったならば、世界の表面に大変化を来たしたろう**」

と、漱石は『我輩は猫である』の中で、苦沙弥先生に字義通り正確に引用させている。
　がその前に、人が財力や権力を鼻に掛けて自慢することを大きな鼻で示したいようで、嫌味な金田の妻・鼻子(猫が付けたあだ名)の大きなカギ鼻をくどくどと描写している。そういう目で下を見ると、左のコインはカギ鼻で、右の彫像は鼻が長大ではないか？
クレオパトラが実際には鼻が長すぎて難点であったのであれば、このパスカルの言葉は、《鼻が少し短かったら美人になって歴史は変わっただろう》という意味にも受け取れる。

当時のコイン（裏はアントニウス）　頭部像(紀元前40年頃)

　この言葉は、人間のむなしさをいう文脈で語られている。
　人間のむなしさを十分に知りたければ、恋愛の原因と結果を考察するだけでよい。
その原因は「私には分からない何か※1」なのに、その結果は恐るべきものだ。
この「私には分からない何か」・・・・・が、あまねく大地を、王公を、軍隊を、全世界を揺り動かす。
　クレオパトラの鼻。もしそれがもう少し小ぶり※2 だったら、地球の表情は一変していたことだろう。―――パスカル『パンセ』塩川徹也(訳)

※1:「私には分からない何か」とは当時流行った劇のセリフのようだ。

※2:「短い」は「小ぶり」と意訳されている。つまりパスカルは《人の心を瞬時に捉えて動かすものは、小さなことであ

れ大きな変化をもたらす》ことを言うために、クレオパトラの顔の小さなパーツを例に採り上げたのだ。

エリザベス・テーラー『クレオパトラ』1963

クレオパトラは、知性と美声で人々を魅了した。

クレオパトラは「世界の結び目」と言われた学術文化都市アレクサンドリアに生まれた。深い教養と優雅な身のこなしと魅力的な声で、人の気をそらさない話術が巧みだった。歴史家プルタルコスは歴史書『英雄伝』で、クレオパトラが複数の外国語(エジプト語・エチオピア語・メディア語・パルティア語・アラビア語・シリア語・ヘブライ語など)に通じた知的な女性と伝えているが、容姿については「美しさは並外れたものではなく、見る人に衝撃を与えるものでもないと言われていた」と書いている。
クレオパトラの虜になったローマのカエサルは「楽器のようだ」と声を絶賛しているが、容姿については語っていない。ということは失神するほどの美女ではなかったようだ。

モニカ・ベルッチ『ミッション・クレオパトラ』2002

クレオパトラは、命を懸けて英雄たちを誘惑した。

クレオパトラは、国を救うための数奇な運命を受け入れ、才覚を駆使して懸命に生きた。クレオパトラが 18 歳で王位に就いて 3 年後、ローマの**ガイウス・ユリウス・カエサル**がエジプトに上陸すると、クレオパトラは厳重な警護をくぐり抜けてカエサルに会うため、自分を寝具袋(絨毯)に包ませて贈り物として王宮に届けさせ、カエサルの心を射止める。

カエサルが「**ブルータス、お前もか**」と叫んで暗殺された後、**マルクス・アントニウス**が台頭すると、クレオパトラは、今度はギリシア神話の女神アプロディーテーのように着飾り、香を焚いてムード作りをしてアントニウスを魅惑。色香には自信があったのだ。

アントニウスは、ローマの新しい支配者**オクタウィアヌス(アウグストゥス)**に敗れた際、クレオパトラ死去の誤報を聞いて自殺すると、クレオパトラは自分を毒蛇に咬ませる。
スエトニウス『皇帝伝』によれば、アウグストゥスは身長約 170cm、体格は均整が取れ、稀に見る美男子であったそうだが、クレオパトラはアウグストゥスには媚びなかった。

人は平凡に生まれたり、非凡に生まれたり、その中間あたりを右往左往しつつ生きている。日々の小さな選択が人の進路を作っていき、それが絡み合って世界の歴史を形作っていく。

人生や歴史とは、小さな出来事で大きく変わるほど不確定かつ流動的なものだと言えるし、美人度とは、顔のパーツのわずかな違いから生じるので気にすべきではないとも言えるし、知性と肉体の変革は困難ゆえ、メイクとファッションで頑張る理由がそこにある。

アウグストゥスは、パクス・ロマーナ(ローマの平和)を実現した、ローマ帝国の初代皇帝。最期の日、友人に「私がこの人生の喜劇で自分の役を最後まで巧く演じたとは思わないか」と尋ね、「この芝居がお気に召したのなら、どうか拍手喝采を」と喜劇の口上を付け加えた。※資料は主に Wikipedia を参考にしています。